

慈眼寺たより

心のふる里

重松智広

近頃は、少し時間が出来たせいか、今までのいろいろな事を懐かしく回想することがあります。

人は人生の中で、いろいろな処へ旅をします。そんな時「あなたのふるさととは」と尋ねられると、どう返事をしたものかと考えてみました。

父の仕事の関係で、大阪より名古屋市そして春日井市下市場と、その地域・地域での異なった文化や風習、そして多くの人々との出会いと別れがありました。良し悪しにつけ、出会った人の心の奥に、少しでも私の居た場所との証があり、そして思い出の絆となつて残っているならば、それは私の大切な心のふる里かもしれませぬ。縁あつてこの下市場といふところに居住して四十数年、こ

第14号
平成25年7月
春日井市下市場町
「慈眼寺」
電話 81-6801
編集 伊藤秀文

の地も来た当初(二百数十軒)に比べて、特に区画整理後いろいろな価値観の違った方々が住む大きな町になりました。

文化や気質など大きく変わり、得たもの、また失ったものもたくさんあると思いますが、その評価はその時代・時代に生きている人たちが決めるのでしょう。

いずれにしましても子供たちにとつて、生まれ育つて旅立つていった下市場がいつでも安心して帰つて来られる大切なふる里であるようにと願っています。

ふる里を追憶してみて思うことは、「私の思い出の中で、微笑みかけてください。楽しかった子供の頃を思い出せるから。」「私の心の中で笑ってください。また嬉しかった子供の頃に帰れるから。」「私の心の中に微笑みかけてください。あの頃

の私に幾度でも戻れるから。」ですね。

人生五十年と言われた頃は「生病死感」であつたそうですが、その後、医療技術も良くなり、近年では「老」の文字が加わり「生老病死感」だそうです。その人類だけにいただいた永い老いを、如何にして充実した日々で暮らすのか、私たちに与えられたひとつの大きな役割なのかも知れませぬ。

この地で老後を迎える私にとつて、これからもいろいろな人たちとの出会いがあるでしょう。それを楽しみに大切にしていきたいと考えていますし、これからの出来事も私にとつて何よりの財産になるのではと感じております。

この下市場という土地が永遠のふる里となつた今では、老子の言葉の「天網恢恢疎にして漏らさず」は好きな一節ですが、その後に「終わりよければすべて良し」と付け加えれば幸いと願っています。

「年寄り笑つな」ではないですが、時にはいろいろな事があるいろいろな意味で深く、広く理解

できるような気がするこの頃です。「老いるということも、そう悪くはないですよね。」

〈青柳歌壇・俳壇〉

いにしえの夢をつなぎし若き園
記念樹に桜植えたりよろこばし

・桜井千津

枝垂れ桜寺の玉砂利触れるまで
海底に街出来たと鬼やんま

・伊藤清雄

健やかに迎えし傘寿にただ感謝座右
の銘は無事は名馬

彌勒山大谷山に道樹山三山歩きに新
緑謳歌

・今井正

住職と行く末語る日向かな
小雪まうこの冬五度も喪服着る

・秀

初生りの大きなきつり仏壇へ
一畝を打ち返したる梅雨晴れ間

・貴美子

桐咲くや釈迦牟尼は目を閉じしまま
子供の日昏れて大きな月のぼる

・矢野孝子

かんね公園と本林公園

木村廣孝

かんね公園は平成二十四年四月に四ツ谷の区画整理事業のなかで四ツ谷神明社の東側に整備され地域の小公園として利用されておりますが、「かんね」という名前の由来についてしらべてみると、「かんね」を漢字で書くと「勘右」だそうです。公園周辺の字名が「勘右屋敷」とよばれていました、右があるなら左はどうか？調べてみると、四ツ谷の区画整理の事務所の周辺が、「欽左屋敷」です、これで左右でそろいました。が次になぜ左右あるのか？となります。両屋敷の中間（四ツ谷のメインストリート）に下（した）街道なる道路があります。東は大泉寺、坂下を経て内津峠、西は鳥居松の四九の市通り、勝川、大曽根を経て名古屋城へ、城からお殿様が鷹狩りなどで利用したり、町人が「御嶽」詣で通った街道であり坂下宿に近く殆んど素通りされていたでしょう、武家は中山道を使い一般町人の流通街道であり荷役馬の需要が多かったそうです。が、下街道のことは郷土史の専門家にお願ひしましょう。

この四ツ谷と言う地名であるが、下市場土地区画整理組合発行の「下市場誌」の資料「尾張御行記（一八二二年）」の文章をそのまま転記すると、「……又街道筋二出ヤシキアリ、四ツ屋ト云……」と記してあり、明治維新から約五十年前のことですが、そのまま「四ツ屋」

になっていたかもしれない、四ツ谷から四ツ谷へ、また字名の欽左・勘右の両屋敷のこともよくわからない、現存している秋葉三尺坊なる建物があります。が、年末にここで火祭りの行事があり近隣の方が参拝し防火を願っていましたが現在では参拝できるように整備されております、また、旧国道十九号の篠木町八丁目の交差点の南西の角の春日井運輸さんの敷地内に、「山の神」なる小さな石碑があります。以前ここは高射砲の砲台跡地でこの角に祀られていました。

また、かんね公園と同じころ電源開発の南側に整備された「本林公園」についても、この周辺一体の雑木なかで子供のころキノコ採りで、松茸も採ったこともあったが、アオハチ（ハツタケ）や ソナ（ホウキダケ）などもありました。春のお彼岸のころだったとおもうが、シヨウロとよんでいた直径一センチほどの丸い球のようなキノコ？が日当たりのよい松の木の回りに地面を少し押し上げて生えていたのを採って塩茹でたべた記憶があるが、以前テレビで日本のトリフとして放映されこれの名が「松露」（シヨウロ）とよばれているとコメントしていた、なかなか風流な名前です。年配の方のなかにはこの「シヨウロ」なるものをこ存じの方もみえるとおもいます、また、この地域周辺の字名が「本林（ほんばやし）」となっており、これは重箱読みのおうです。

ここからは個人的な独断と偏見ですが、江戸時代の尾張二代藩主が水野村（瀬戸市中水野）に「御林方奉行所」を作り山林の保護し陶器の焼き物が盛んでその燃料の松などの盗伐を取り締まり（東春日井郡、愛智郡）

この森を「御林」と呼んでいたそうですが、よみかたを「オハヤシ」と読むと、「お囃子」と聞こえ知らぬ人が聞いたら「お囃子方奉行」では奉行の品格にかかわるので、ここでは藩の管理の森であることから別の敬語を使つて読むと「おんばやし」（現代でも。会社御中など）となる、この森が四ツ谷から大泉寺地内になつておりその周辺の荒れ地の新田の開発で畑となり村人が「おんばやし」とよんでいたのが、いつしか変化して「ほんばやし」となり字名の「本林」となつたのか、下街道沿いで森の保護の結果、下市場村、四ツ谷村への防災林になつていたかも、燃料となる松、ミズナラなどの木を乱伐し地肌の山にしていたら豪雨で土砂もろとも押し寄せていたであろう、もちろん、村人たちは木を切ることは、御法度である、山火事を防ぐため秋葉神社を祀り、「山の神」を祀り平穏を願ひ、現在の沢渡池の近くにも「山の神」や「水神様」が祀られている。現在のかんね公園内にミズナラの大木が数本残っているが、何世代か前の種から引き継がれた木ということでしょう、いずれにしても、欽左屋敷、勘右屋敷なる字名から「かんね」という名称で現在に残してい

ただいたことはいれしいが、出来れば「勘右公園」の名称にしてもらいたいものです。ちなみに「丹羽郡大口町伝右」と書いて「おおぐちゅうでんね」と読む町があります。

お盆のお知らせ

棚経の日程

八月十日 熊野、神領方面
八月十一日 穴橋（県道東）掘北
八月十二日 浅山、鳥居松

勝川、名古屋方面

八月十三日 四谷、南部

八月十四日 下市場

八月十五日 穴橋、篠木、関田、上条 高蔵寺、坂下方面

右は原則です。 今年はまだ一部変更になります。

お施餓鬼

お施餓鬼は、毎年八月十八日今年は日曜日になります。七月一日から受付をしております。早い時間帯は、予約済みになっております。ご希望の方はなるべく早めにお申し込みください。電話で結構です。お布施は今までどおりで

初盆施餓鬼 五万円
特別大施餓鬼 三万円
大施餓鬼 二万円
合同施餓鬼 一万円 です。

精霊流し

八月十五日の午後四時半から慈眼寺の山門で行います。明るいうちにお持ちください。

内津川雑感

住職 春日井浩道

今では信じられないかもしれないが、私はこの内津川で泳ぎを覚えた。といってもほんの二、三メートル泳げるようになっただけである。皆さんは四ツ池や沢渡池で泳いだ人が多かったろうが、低学年の頃の私には、泥水に近い池の水がなんとなく苦手であった。今の南城橋がまだ流れ橋であった頃、そのコンクリートで作った橋脚の周りだけは、数十センチの深さの淵が出現することもあり、子供の水泳には手頃だったのである。

まだ家庭の排水さえも流さなかったころだから、水は大変きれいで多くの魚影が見られた。Kさんなどはそこで時々投網を投げておられたものである。もっとも魚がたぐさん採れたような記憶はない。内津川という川は、流域面積が狭いせい、日照りが続くとき直ぐに干上がりつつあるものである。夏の頃、干上がりそうな川のあるところにきた水溜りに、フナやらの小魚たちがひしめいていて、そんな魚たちを労せずして捕まえるのも楽しみであった。なにしろバケツを持っていき魚を拾ってくるだけである。時にはそんな水たまりの泥の底に大きなナマズが潜んでいることもあった。

ここまでは回想である。最近では出川から大留の方へショートカットがされているので、川の水は慢性的に少ない。ただ時折の豪雨があると、堤防スレスレまで水が来る。それでもしばらくすると干上がってしまう。この干上がりも南城橋のあたりがいちばん激しいようである。出川橋の辺りでは流れている水があるが、下流に来るに従って伏流水となる。生目のあたりでは、庄内川の水が逆流するのか水量がある。ということで、この神領近辺が真つ先に干上がるのである。

今年の五月の連休に横浜から孫たちが来た。来て早々に、散歩に行つてくると繰り出していった。しばらくして帰ってきて「じいちゃん、大変だ。魚が死にそうだ。」という。聞けば内津川の水が干上がりそう、小さな水溜りにたくさん魚がひしめいているという。なるほど。しかし孫たちよ。それは生き物の運命なのだ。布団の上でちゃんと死ぬるのは、人間くらいのも。芽を出した植物でも日照りが続けば枯れてしまうもの。川の水が枯れたら魚は死ぬものに決まっている。昔から、多くの生物がいろんな死に方をしてきたのだ。などと言つて諦めさせた。が、どうしても諦められないよ

うで、帰る前日の夕方になつてもう一度見てくる、と言いつ出した。またしばらくして帰ってきて「飼いたい」という。聞けば八十センチもある鯉が二匹とナマズが三匹だという。大体そんな魚を入れる池など有りはしない。ダメ。「なら助けてやりたい。」勝手にしろということで、とりあえず黙認。バケツを持って出かけていった。とても小学生の手におえるような魚ではなかったようで、どんなになつて格闘していたら、Hさんが助けてくれたとか。娘も応援に繰り出し、二匹の鯉を自動車で地蔵川まで運ぶという。運ぶ途中で見せに来てくれたが、大きな魚がビニールにくるんであつて鯉だか鮭だか分からない。ナマズはバケツに入れてあつた。地蔵川へ流したら元気に泳いでいったという。よかったね。もしかすると竜宮城から何かのお使いが来るかもね。

実はその日の午前中、孫たちと定光寺公園へ行ってきた。その定光寺の橋から見ると一メートルくらい鯉が庄内川を何匹も泳いでいる。Hさんによれば、それは庄内川の独特な腹の小さい鯉だという。夕方に孫たちが助けた鯉もそれだそう。考えてみれば、昔、鯉は内津川にはいなかったようである。してみるとこれは庄内川から入り込んできて、干上がってしまったものだろう。

では、なぜ干上がる川に迷い込んだか。魚は前に目がない、すなわち前の見えない魚にとつて干上がりそうな川かどうかはどうやって見分けられるのだろうか。いや、これは前に目があつても同じことである。今まで滔々と流れてきていた水が干上がってしまうことなど到底魚には理解出来ない。毎年干上がる川だつてあるが、その都度たくさん魚が死ぬ。その川が干上がる川であることを知っている魚は全部死んでしまつていないのである。干上がるまで川は魚にとつて絶対的な存在でおよそ水が無くなることは想定外なのでしよう。だつて水が有つたんだもの。

考えてみれば人間様だつて同じこと。まさか・なるなんて想定外なのです。まさかそんな地震が来るなんて。まさか津波が来るなんて。まさか原子力が壊れるなんて。まさか食べ物が無くなるなんて。まさか、なんてことはいつばいあります。考えてみれば、安定なんていうのは何時崩れるかわかりません。それでこそ衰退も発展もあるのです。仕方ないことは仕方がない。昔から磐石なものはない。諸行は無常なのである。

申し込み見舞いお中夏 上げます

檀方総代	伊藤辰男
々	伊藤久幸
々	伊藤秀文
々	伊藤正廣
々	大野和義
々	大野悟
々	木村廣孝
住職	春日井浩道

最近の生物

最近読んだ本で面白いことが書いてあった。ウイルスについての本である。ウイルスとは生き物であるのかどうか定説がないのだそうである。それは自力で増殖できないからだという。ただ、ウイルスは自前の遺伝子を持っており、それが既存の生物の細胞に入り込んで、その細胞の機能を拝借して増殖する。増殖することだけを見れば生物学的であるが、自力でそれができないところが生物でないのだそう。ただ、全く自然にそんな物質があるはずもないし、増殖さえすれば生き物扱いしてやつてもいいような気がする。

このウイルスの遺伝子は普通の生き物と同じDNAというのとRNAの二種類があつて、DNAは安定しているがRの方は非常に不安定で変異しやすいのだという。だから鳥インフルエンザのウイルスは毎年変化してくるのでワクチンが効きにくいのだそう。そしてウイルスが生き物らしく振る舞うのは、ほかの生き物の細胞の中にあるときだけだ。

興味深いのはほとんどの生物の細胞にある核。その中には遺伝情報やら生き物にとつて大切なものが保管されているが、なんとこれがその昔、ほかの生物に取り付いてしまったウイルスではないかという説が出てきた。これによれば人間も木もタコもすべての生物も結局ウイルスの集合体になつてしまふ。まるで珊瑚と珊瑚虫のような関係だ。人間はせっせとウイルスの遺伝子を増殖に貢献しているだけになつてしまふ。

また、生き物の細胞の中にはミトコンドリアというものがあつてエネルギーを作り出す大切なものである。それが実は細胞に寄生している別の生き物だそうである。その証拠にミトコンドリアは宿主とは別の遺伝子を持ち、勝手に増殖するのだそう。ただこれがいわゆる寄生でないことは、もはやそれが居ないと宿主(つまり我々)が生きていけないことから明らかである。同じように植物の葉緑体も宿主とは別の生き物であつたという。こうしてみると一体生き物とは何だろう。個人なんて言つてみたところで、しょせん生き物

集合体の舵取り役に過ぎないのではないか。何だか自分の責任は軽いのではないかという気になつてくる。諸法無我とはこんな意味だったのだろうか。

お墓の管理

平成六年に造成されたお墓もほぼ二十年になります。以前は老人会に清掃を委託してありましたが、現在では清掃会社にゴミの収集だけをお願いしてあります(月額一万三千円ほど)。大体皆さんにはきれいにお願いしたいでありますが、お墓の建つていない一部の区画は草が生え誇つて隣近所の方が迷惑しております。何卒、清掃をよろしく願います。

敷レンガの並びが崩れてきました。修繕してもらいました(二十二万円)。また、水道の支柱がひび割れましたので取り替えしました(五万六千円)。

またお気づきの点がありましたらお申し出ください。

編集後記

慈眼寺たよりも十四号になり、やつと七年経ちました。毎回原稿集めに四苦八苦です。世の中はバタバタといろんなことがあつて変わっていきます。政界では民主党の凋落が続いており、また大阪のタレント市長も馬脚を表しかつてきました。お坊ちゃん総理が憲

法を改正しようとしています。皆さん思いつきだけで行動しているようですが大丈夫でしょうか。その地位に居られるのは、自分の徳でもなく実力でもない、ただの知名度だということを承知なのでしょうか。幸い景気も上向きになつてきたそうですが、単なるバブルに終わつてしまわないように願うのみです。

さて今年四月、神明神社奥のお稲荷さんの鳥居を氏子総代の総意で新たに新築完成いたしました。総本宮の伏見稲荷さんは別名千本鳥居といわれ境内の広さは甲子園球場の二十二個分です。全国八万の神社のうち稲荷神社は二万七千、個人の家や企業にある祠を加えれば数百万社あるそうです。これほどまでに広がった理由のひとつは秀吉公が伏見城の守護神としてお稲荷さんを祀つたからだとも言われております。皆様も是非一度お参りください。

「慈眼寺たより」 第十四号

平成二十五年七月十日 発行

ホームページ

http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/